

岡山県感染症週報 2017年 第35週 (8月28日～9月3日)

岡山県は『腸管出血性大腸菌感染症注意報』発令中です。

◆2017年 第35週(8/28～9/3)の感染症発生動向(届出数)

■全数把握感染症の発生状況

第33週	5類感染症	梅毒	1名(40代 男)
第34週	2類感染症	結核	3名(60代 女 1名、80代 男 1名、90代 女 1名)
	5類感染症	梅毒	1名(30代 女)
第35週	2類感染症	結核	4名(20代 男 2名、60代 女 1名、80代 男 1名)
	3類感染症	コレラ	1名(80代 女)
		腸管出血性大腸菌感染症	6名(O157:20代 男 1名、30代 男 1名・女 1名、40代 女 1名、60代 女 1名、70代 男 1名)
	4類感染症	A型肝炎	2名(20代 女 1名、40代 男 1名)
		レジオネラ症	1名(90代 男)

■定点把握感染症の発生状況

患者報告医療機関数：インフルエンザ定点84、小児科定点54、眼科定点12、STD定点17、基幹定点5

○RSウイルス感染症は、県全体で92名(定点あたり0.59→1.70人)の報告があり、前週より大きく増加しました。

【第36週 速報】

○腸管出血性大腸菌感染症 3名(O157:幼児 男 2名、20代 男 1名)の発生がありました。

(9月4日～7日)

1. **腸管出血性大腸菌感染症**は、6名の報告があり、そのうちの4名は前週に発生した食中毒関連の報告数でした。2017年第35週まで(～9/3)の報告数は48名となっています。さらに第36週(9/4～9/7)にも3名の報告があり、患者の発生がつついています。手洗いなどを徹底するとともに、食品は冷蔵庫で保存し、調理後はできるだけ速やかに食べる、食肉は中心部まで十分に火を通すなどの食中毒対策を励行し、感染予防に努めましょう。詳しくは、岡山県感染症情報センターホームページ『[腸管出血性大腸菌感染症注意報 発令中!](#)』をご覧ください。
2. **梅毒**は、第33週に1名、第34週に1名の報告があり、2017年第35週まで(～9/3)の報告数は103名となりました。近年、全国的に急増しており、大きな問題となっています。県内の発生状況など、詳しくは、「[今週の注目感染症](#)」をご覧ください。
3. **コレラ**は、1名の報告がありました。岡山県では第34週に2004年以来13年ぶりの患者が発生しており、2017年第35週まで(～9/3)の報告数は2名となりました。報告された2症例の感染経路については、調査中ですが、近年では、コレラ患者のほとんどが輸入感染症として報告されています。稀に国内での感染も報告されていますが、輸入食品などの汚染によるものと推定されています。コレラ流行地域へ渡航する際は、食事前や排便後の手洗いを励行するとともに、生水や生野菜など、火が通っていないものは避けましょう。
4. **RSウイルス感染症**は、県全体で92名(定点あたり0.59→1.70人)の報告があり、前週より大きく増加しました。過去10年間の同時期と比較して最も多い状態で推移しています。地域別では美作地域(4.33人)、岡山市(2.29人)、倉敷市(2.18人)の順で定点あたり報告数が多くなっており、備前地域と真庭地域を除く全ての地域で患者が報告されています。県内の発生状況など、詳しくは、「[今週の注目感染症](#)」をご覧ください。

流行の推移と発生状況

疾病名	推移	発生状況	疾病名	推移	発生状況
インフルエンザ	↑	★	RSウイルス感染症	↑	★★★★★
咽頭結膜熱	↑	★	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	→	★
感染性胃腸炎	→	★★	水痘	↑	★
手足口病	↑	★	伝染性紅斑	→	★
突発性発疹	↑	★★	百日咳	↑	★
ヘルパンギーナ	↑	★	流行性耳下腺炎	↑	★
急性出血性結膜炎	→		流行性角結膜炎	↑	★
細菌性髄膜炎	→		無菌性髄膜炎	→	
マイコプラズマ肺炎	→		クラミジア肺炎	→	
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	→	* 感染性胃腸炎(ロタウイルス)については、2013年第42週から報告対象となったため、前週からの推移のみ表示しています。			

【記号の説明】 前週からの推移： ↑：大幅な増加 ↗：増加 →：ほぼ増減なし ↓：大幅な減少 ↘：減少
 大幅：前週比100%以上の増減 増加・減少：前週比10～100%未満の増減

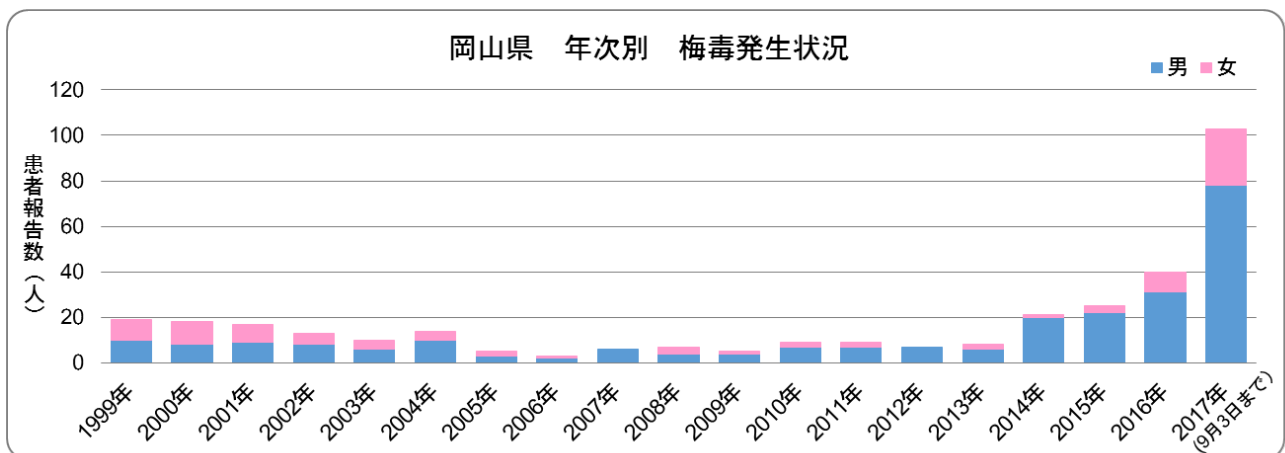
発生状況：今週の流行状況を過去5年間と比較し、5段階で表示しています。(発生数が多いことを示すものではありません。)
 空白：発生なし ★：わずか ★★：少し ★★★：やや多い ★★★★：多い ★★★★★：非常に多い

今週の注目感染症(1)

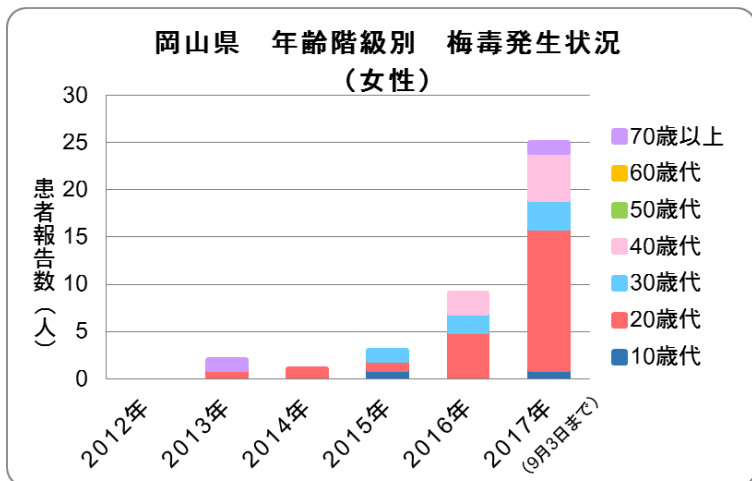
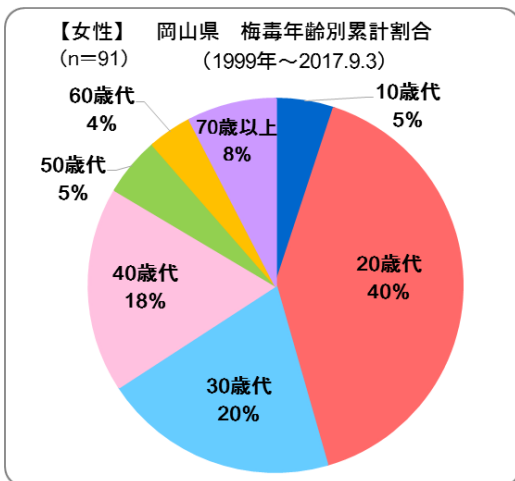
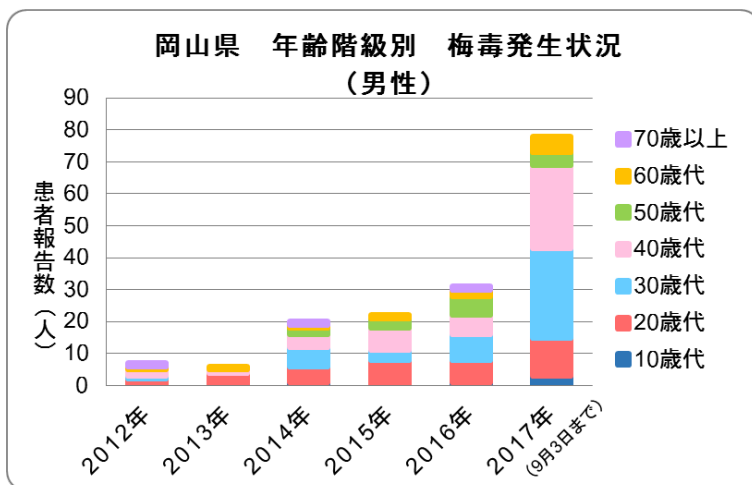
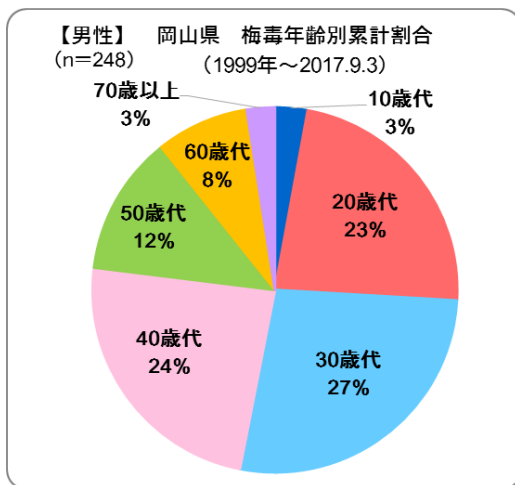
梅毒

【岡山県の発生状況】

2017年第35週まで(～9/3)の岡山県の報告数は103名であり、前年より患者が急増しています。前年同時期(25名)と比較すると約4倍となっており、1999年以降最も多かった2016年の年間報告数(40名)を大きく上まわっています。男女別では、男性は78名で、前年の年間報告数(31名)の約2.5倍、女性は25名で、前年(9名)の約2.8倍となっています。近年では、男性が大半を占めていましたが、2016年以降女性の報告数が急増しています。



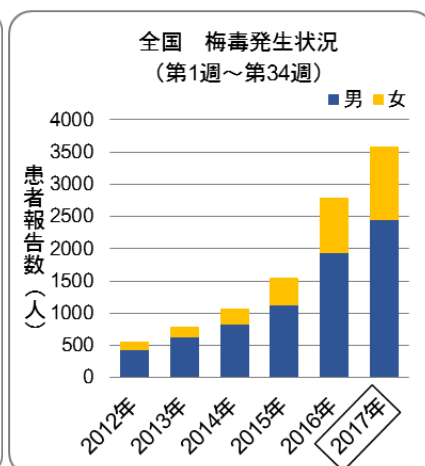
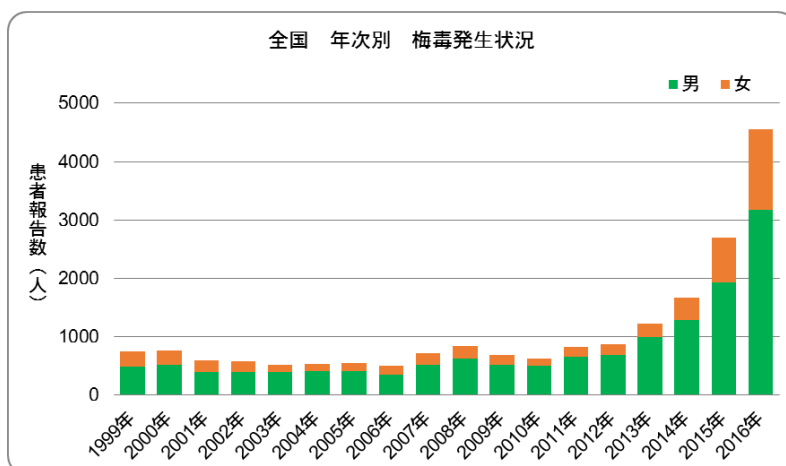
年齢別累計割合では、男性は30歳代（27%）、40歳代（24%）、20歳代（23%）の順で高くなっています。女性は20歳代（40%）が最も高く、次いで30歳代（20%）、40歳代（18%）の順となっており、特に2016年以降、20歳代の報告数が急激に増加しています。



【全国の発生状況】

2017年第34週まで（～8/27）の全国の報告数は、3,571名で、男性2,447名、女性1,124名でした。前年同時期（2,778名）と比較すると、約1.3倍となっています。

2017年第1週～第13週（1/2～4/2）の報告数は、1,105名（前年同時期933名）でした。2017年第14週～第26週（4/3～7/2）の報告数は、1,426名で、前年同時期の報告数（1,161名）を上まわっています。第14週～第26週の人口100万あたり報告数を都道府県別でみると、東京都（33.90）、香川県（25.60）、岡山県（20.30）の順で多くなっており、岡山県は、全国第3位となっています。



【梅毒とは】

梅毒は、主に感染している人との性器、口、肛門などの粘膜を介した性行為によって起こる感染症です。原因となる病原体は、梅毒トレポネーマというスピロヘータ（細菌の一種）で、病名は症状にみられる赤い丘しんが楊梅（ヤマモモ）に似ていることに由来します。症状が出たり消えたりするⅠ期、Ⅱ期（症状参照）は、排菌していても自覚症状がないため、感染に気づきにくいと言われます。検査や治療が遅れると、病気が進行し、パートナーへうつす可能性があります。また、AIDS（後天性免疫不全症候群）など他の性感染症にも感染しやすくなります。

感染の有無は血液検査（抗体検査）で分かります（感染初期においては、感染部位から直接病原体の検出による診断が可能です）。抗体ができるまでに時間がかかるため、感染の可能性があった日から十分な期間（約3週間）をおいて、検査をする必要があります。早期に治療すれば完治しますが、一度感染して抗体が体内にあっても終生免疫は得られないため、感染が繰り返されることがあり、再感染の予防が必要です。

妊婦が梅毒に感染すると、胎盤を通して胎児に感染することがあり、先天梅毒（症状参照）の原因になります。岡山県では妊婦検診の際、無料で梅毒の血液検査を実施して、母子の健康状態の確認を行っています。

【症状】

感染後、約3～6週間程度の潜伏期間を経て、経時的に様々な臨床症状が出現します。その間、症状が軽快する時期があるため、治療の遅れにつながることがあります。感染症法における感染後の時間経過による特徴は次のとおりです。

第Ⅰ期（感染部位の病変）：感染後約3週間

感染して約3週間後、感染がおきた部位（主に陰部、口唇部、口腔内、肛門等）にしこりができることがあります（初期硬結）。また股の付け根の部分（鼠径部）のリンパ節が腫れることもあります。痛みがないことが多く、治療をしなくても症状は自然に軽快します。しかし、体内から病原体がいなくなったわけではなく、他の人にうつす可能性もあります。感染した可能性がある場合には、この時期に梅毒の検査を受けることが重要です。

第Ⅱ期（病原体が血液によって全身に移行）：感染後数か月

治療をしないで3か月以上を経過すると、病原体が血液によって全身に運ばれ、手のひら、足の裏、体全体にうっすらと赤い発しんが出るがあります。小さなバラの花に似ていることから「バラ疹（ばらしん）」とよばれています。発しんは治療をしなくても数週間以内に消えることが多く、また、再発を繰り返すこともあります。しかし、抗菌薬で治療しない限り、梅毒トレポネーマは体内に残っており、梅毒が治ったというわけではありません。

晩期顕症梅毒：感染後数年

感染後、数年を経過すると、皮膚や筋肉、骨などにゴムのような腫瘍（ゴム腫）が発生することがあります。また、心臓、血管、脳など複数の臓器に病変が生じ（神経梅毒）、場合によっては死に至ることもあります。現在では、比較的早期から治療を開始することが多く、抗菌薬が有効であることなどから、晩期顕症梅毒に進行することはほとんどありません。

先天梅毒

梅毒に感染している母体から胎盤を通じて胎児に伝播される多臓器感染症です。症状の出現時期によって早期（生後2年以内）と晩期（生後2年以降～20年）に分類され、感染乳児の2/3は、出生時は無症状で身体所見は正常とされています。早期先天梅毒では、生後まもなく皮膚病変に加え、鼻閉、肝脾腫などの症状が認められます。晩期先天梅毒では、乳幼児期は症状を示さずに経過し、学童期以降に Hutchinson 3徴候（実質性角膜炎、内耳性難聴、Hutchinson 歯）などの症状がみられます。

【治療・予防】

ペニシリン系の抗菌薬が有効です。海外ではペニシリン系抗菌薬による治療は筋肉注射が主ですが、日本では内服のみに限られています。内服期間は通常3～4週間ですが、医師が治療を終了とするまでは、処方された薬を確実に飲むことが大切です。予防は、感染者、特に感染力が強い第Ⅰ期、第Ⅱ期の感染者との性行為を避けることが基本です。コンドームの適切な使用により感染の可能性は低くなりますが、完全に予防できるとは過信せず、皮膚や粘膜に異常があれば、早めに医療機関を受診しましょう。また、梅毒の感染がわかった場合は、周囲で感染の可能性のある方（パートナー）も検査を行い、必要に応じて治療することが重要です。

梅毒の検査は、県内の保健所・支所（無料、匿名、要予約）又は医療機関（有料、要予約）で受けることができます。詳しくは、保健所・支所又は医療機関におたずねください。

[梅毒に関するQ&A（厚生労働省）](#)

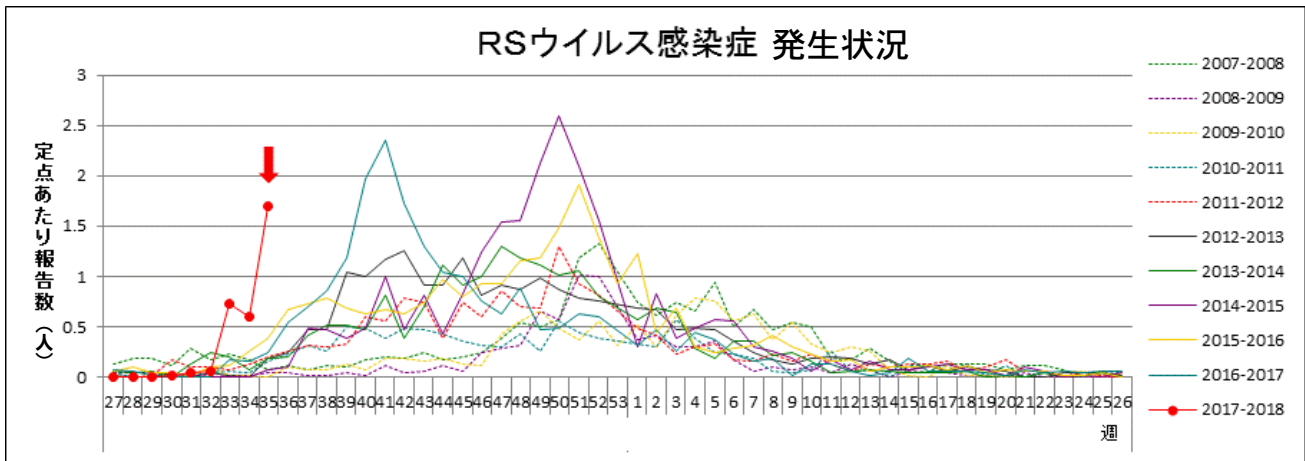
[梅毒とは（国立感染症研究所）](#)

[平成29年度 保健所におけるHIV抗体検査・性感染症検査・肝炎検査日時](#)

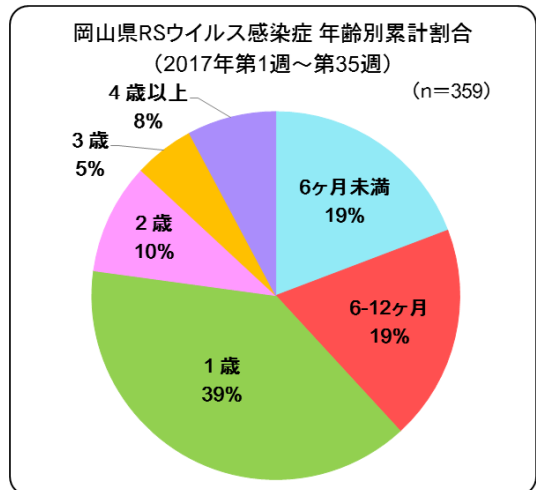
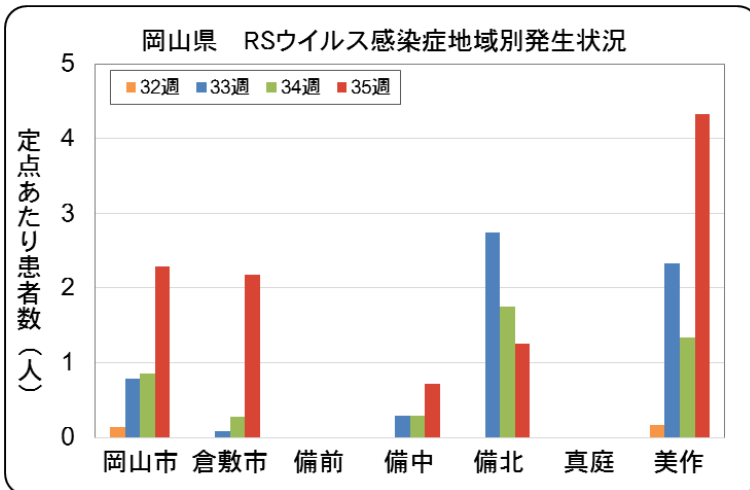
今週の注目感染症 (2)

RSウイルス感染症

【岡山県の発生状況】

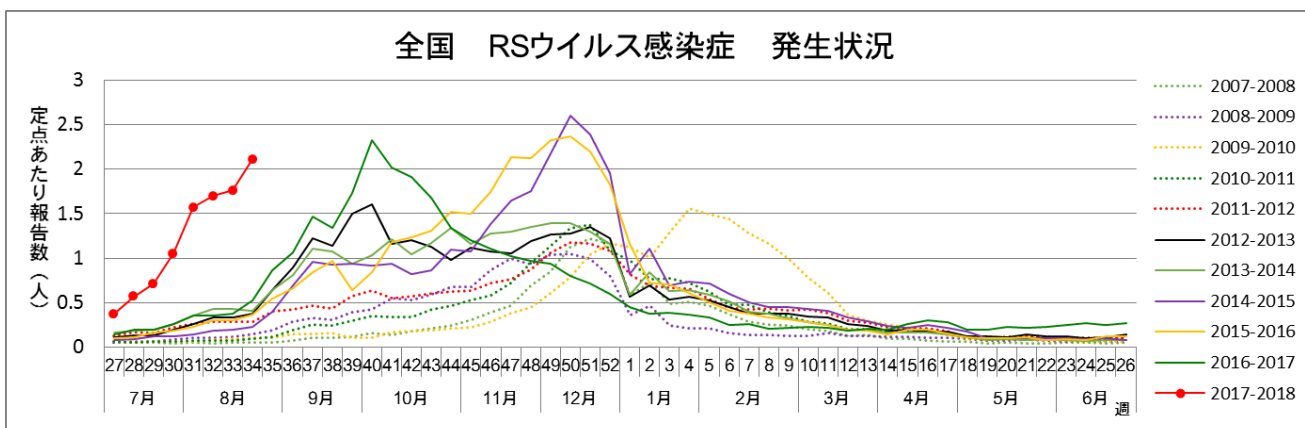


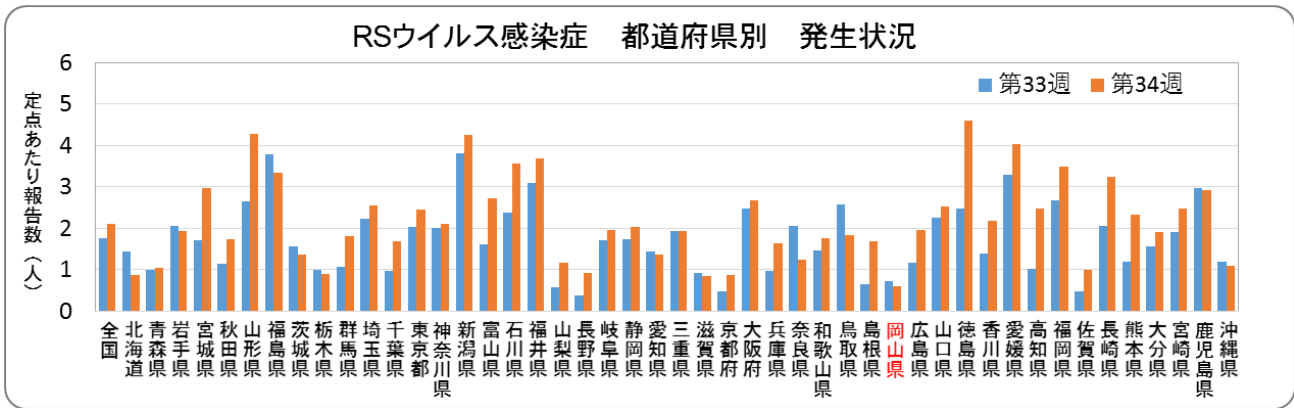
※RSウイルス感染症は、通常、秋から翌年の春にかけて流行するため、今年 27 週～翌年 26 週を 1 シーズンとしてグラフを作成しています。



RSウイルス感染症は、県全体で92名（定点あたり0.59 → 1.70人）の報告があり、前週より大きく増加しました。過去10年間の同時期と比較して最も多い状態で推移しています。地域別では、備前地域と真庭地域を除く全ての地域で患者が報告されています。美作地域（1.33 → 4.33人）、岡山市（0.86 → 2.29人）、倉敷市（0.27 → 2.18人）の順で定点あたり報告数が多くなっており、前週より大きく増加しています。2017年第35週まで（～9/3）の年齢別累計割合では、1歳以下の乳幼児が全体の77%を占めています。例年、秋から冬にかけて多くの患者が報告されており、今後、さらに患者数が増加する恐れがあります。ひきつづき県内の発生状況に注意するとともに、乳児がいる家庭では、特に感染予防に努めてください。

【全国の発生状況】





全国の第34週（8/21～8/27）の発生状況は、定点あたり報告数が2.11人であり、9週連続で増加しました。過去10年間の同時期と比較して最も多い状態で推移しています。都道府県別では、徳島県（4.61人）、山形県（4.27人）、新潟県（4.25人）の順で定点あたり報告数が多くっており、近隣県でも多くの患者が報告されています。

[IDWR 速報データ 2017年第34週（国立感染症研究所）](#)

【RSウイルス感染症とは】

RSウイルス感染症は、RSウイルスによる急性呼吸器感染症です。感染後2～8日の潜伏期間を経て、発熱、鼻汁、咳などの風邪様症状が現れます。約7割の乳児が1歳になるまでにRSウイルスに感染し、そのうちの約3割が肺炎や細気管支炎といった重篤な症状を引き起こします。母体からの移行抗体では感染を防ぐことができないため、生後6ヶ月以内にRSウイルスに感染した場合は、重症化し入院を必要とすることもあります。乳児が感染すると、症状が悪化しても平熱か38℃以下のことが多いため、お子さんの様子に注意することが必要です。熱が下がっても症状が改善せず、ゼーゼーとのがが鳴るなどの症状があるときは、早めに医療機関を受診してください。年齢を問わず、生涯にわたり感染と発症を繰り返しますが、通常は年齢が上がるにつれて、重症化しにくくなります。

【感染経路】

感染している人の咳やくしゃみ、または会話をした際に飛び散るしぶきを浴びてウイルスを吸い込むことや、ウイルスがついている手指や物品を触ったり、なめたりすることによる間接的な接触で感染します。

【乳児への感染予防】

乳児期を過ぎると、RSウイルスに感染しても軽症となり、感染していることに気づかずに、乳児にうつしてしまうことがあります。そのため、咳などの呼吸器症状がある人は、可能な限り1歳未満の乳児との接触を避けることが感染拡大の予防につながります。風邪をひいたと思ったらマスクをする、鼻をかんだ後はしっかりと手を洗う、乳児が使うおもちゃなどは消毒用アルコールで拭くなど、乳児への感染予防に努めましょう。現在、RSウイルス感染症に有効なワクチンはありません。

【治療】

特効薬はないため、症状に応じた対症療法を行います。

[RSウイルス感染症とは（国立感染症研究所）](#)

[RSウイルス感染症に関するQ&A（厚生労働省）](#)

保健所別報告患者数 2017年 35週(定点把握)

(2017/08/28~2017/09/03)

2017年9月7日

疾病名	全県		岡山市		倉敷市		備前		備中		備北		真庭		美作	
	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当
インフルエンザ	3	0.04	-	-	-	-	-	-	1	0.08	-	-	-	-	2	0.20
RSウイルス感染症	92	1.70	32	2.29	24	2.18	-	-	5	0.71	5	1.25	-	-	26	4.33
咽頭結膜熱	11	0.20	6	0.43	1	0.09	3	0.30	-	-	-	-	-	-	1	0.17
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	46	0.85	10	0.71	17	1.55	6	0.60	10	1.43	-	-	-	-	3	0.50
感染性胃腸炎	275	5.09	83	5.93	51	4.64	73	7.30	19	2.71	15	3.75	3	1.50	31	5.17
水痘	20	0.37	6	0.43	10	0.91	3	0.30	1	0.14	-	-	-	-	-	-
手足口病	111	2.06	46	3.29	39	3.55	13	1.30	10	1.43	-	-	1	0.50	2	0.33
伝染性紅斑	2	0.04	-	-	1	0.09	-	-	1	0.14	-	-	-	-	-	-
突発性発疹	19	0.35	8	0.57	4	0.36	3	0.30	2	0.29	1	0.25	-	-	1	0.17
百日咳	2	0.04	-	-	-	-	-	-	2	0.29	-	-	-	-	-	-
ヘルパンギーナ	23	0.43	3	0.21	9	0.82	2	0.20	3	0.43	-	-	1	0.50	5	0.83
流行性耳下腺炎	13	0.24	3	0.21	7	0.64	-	-	-	-	-	-	1	0.50	2	0.33
急性出血性結膜炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
流行性角結膜炎	9	0.75	1	0.20	5	1.25	1	1.00	2	2.00	-	-	-	-	-	-
細菌性髄膜炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
無菌性髄膜炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マイコプラズマ肺炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クラミジア肺炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(- : 0 or 0.00) (空白 : 定点なし)

保健所別報告患者数 2017年 35週(発生レベル設定疾患)

(2017/08/28～2017/09/03)

2017年9月7日

疾病名	全県		岡山市		倉敷市		備前		備中		備北		真庭		美作	
	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当	報告数	定点当
インフルエンザ	3	0.04	-	-	-	-	-	-	1	0.08	-	-	-	-	2	0.20
咽頭結膜熱	11	0.20	6	0.43	1	0.09	3	0.30	-	-	-	-	-	-	1	0.17
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	46	0.85	10	0.71	17	1.55	6	0.60	10	1.43	-	-	-	-	3	0.50
感染性胃腸炎	275	5.09	83	5.93	51	4.64	73	7.30	19	2.71	15	3.75	3	1.50	31	5.17
水痘	20	0.37	6	0.43	10	0.91	3	0.30	1	0.14	-	-	-	-	-	-
手足口病	111	2.06	46	3.29	39	3.55	13	1.30	10	1.43	-	-	1	0.50	2	0.33
伝染性紅斑	2	0.04	-	-	1	0.09	-	-	1	0.14	-	-	-	-	-	-
百日咳	2	0.04	-	-	-	-	-	-	2	0.29	-	-	-	-	-	-
ヘルパンギーナ	23	0.43	3	0.21	9	0.82	2	0.20	3	0.43	-	-	1	0.50	5	0.83
流行性耳下腺炎	13	0.24	3	0.21	7	0.64	-	-	-	-	-	-	1	0.50	2	0.33
急性出血性結膜炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
流行性角結膜炎	9	0.75	1	0.20	5	1.25	1	1.00	2	2.00	-	-	-	-	-	-

濃黄セルに赤字は岡山県地区別感染症マップにおいて、レベル3
薄黄セルに黒数字は岡山県地区別感染症マップにおいて、レベル2 を示しています。

感染症発生動向調査 週情報 報告患者数 年齢別 (2017年 第35週 2017/08/28~2017/09/03)

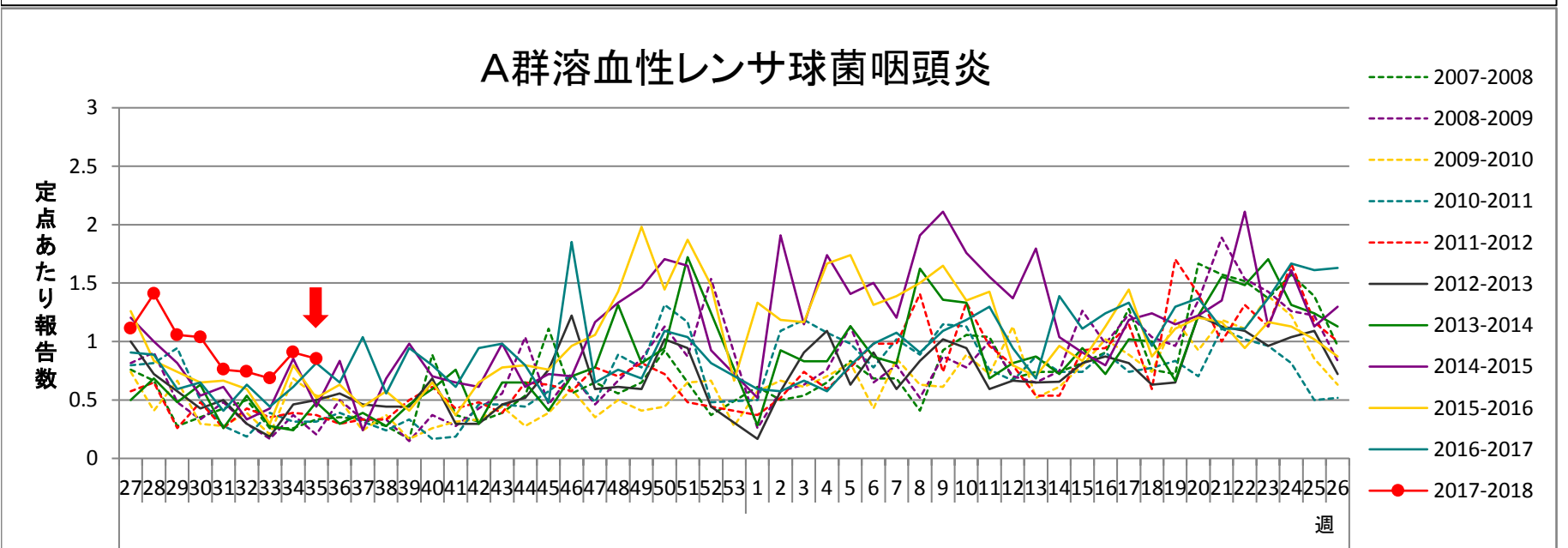
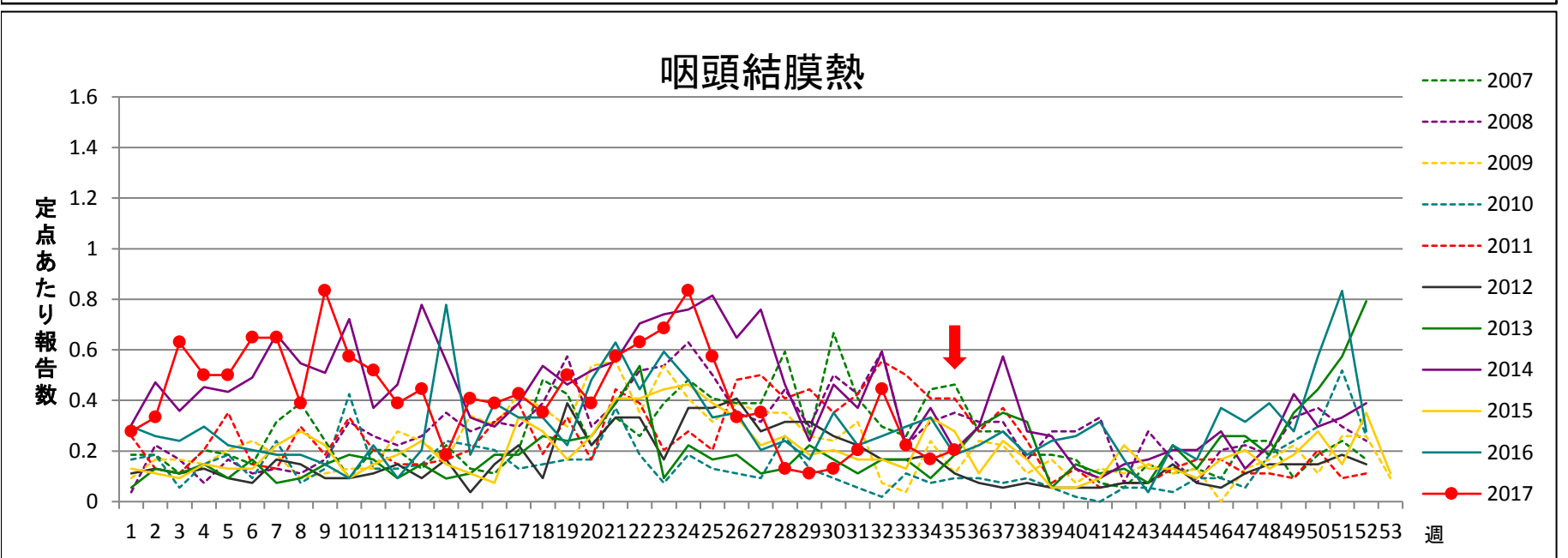
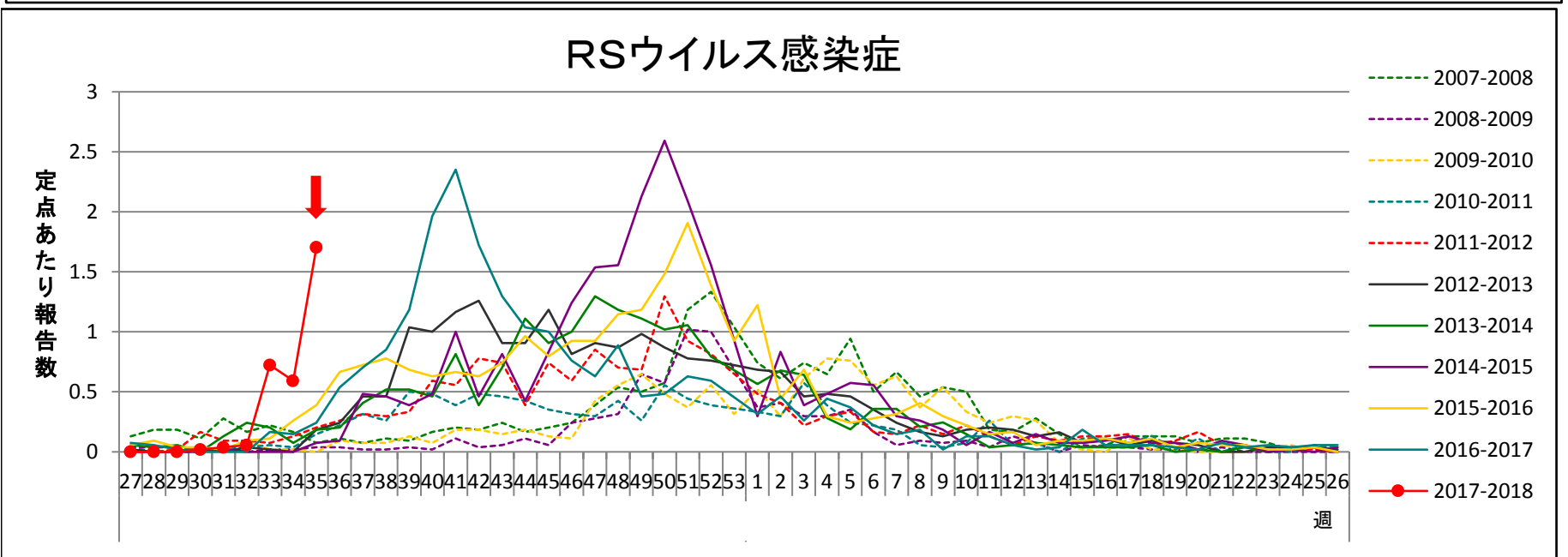
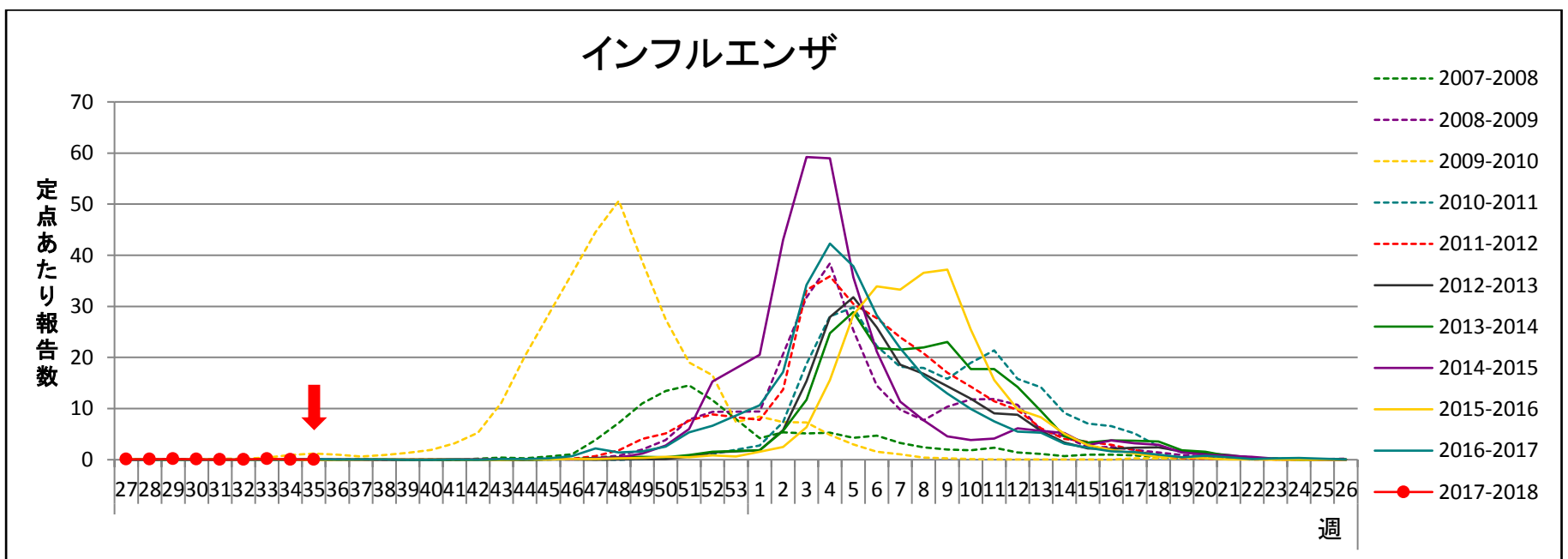
疾病名	合計	-6ヶ月-12ヶ月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10-14	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80~	
インフルエンザ	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-

疾病名	合計	-6ヶ月-12ヶ月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10-14	15-19	20~	
RSウイルス感染症	92	13	15	51	12	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
咽頭結膜熱	11	-	-	4	1	1	1	1	2	-	-	1	-	-	
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	46	-	1	3	5	3	6	5	7	3	4	2	3	-	4
感染性胃腸炎	275	5	34	59	27	20	14	9	10	8	10	12	18	6	43
水痘	20	1	3	4	3	1	4	-	2	-	-	2	-	-	
手足口病	111	-	13	41	20	16	8	4	6	1	-	1	1	-	
伝染性紅斑	2	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
突発性発疹	19	1	5	10	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
百日咳	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	
ヘルパンギーナ	23	-	4	6	5	-	3	1	-	2	-	-	1	-	1
流行性耳下腺炎	13	-	-	1	3	3	1	-	1	1	-	-	2	1	-

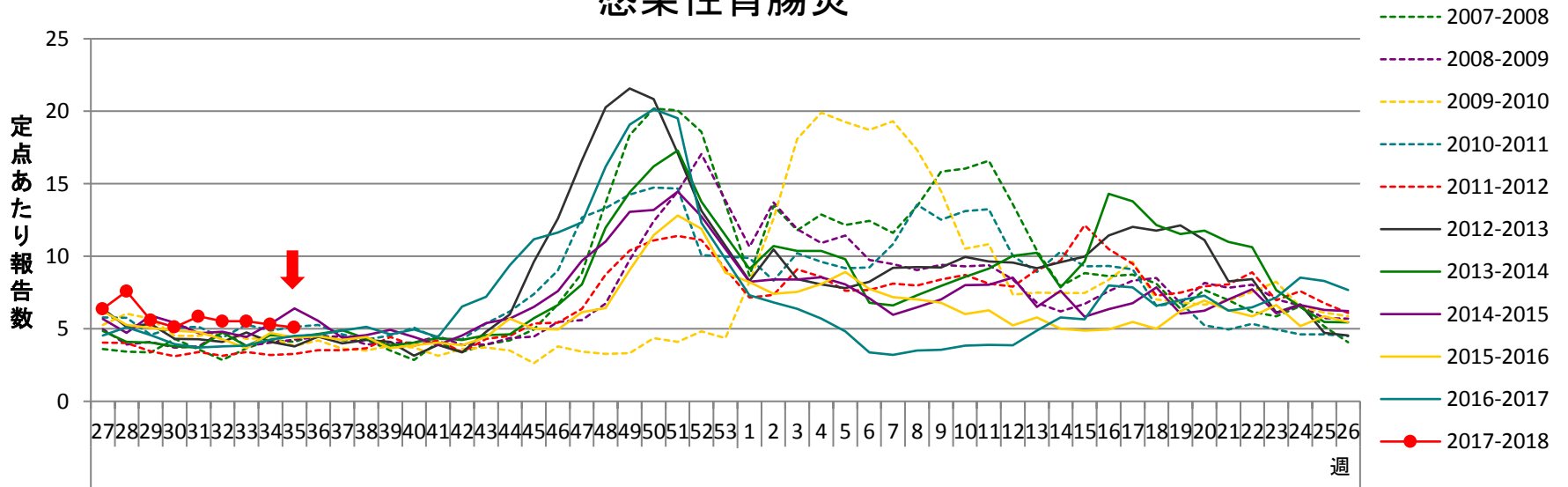
疾病名	合計	-6ヶ月-12ヶ月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10-14	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70~	
急性出血性結膜炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
流行性角結膜炎	9	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	5	-	-	1	1

疾病名	合計	0歳	1-4	5-9	10-14	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	70~
細菌性髄膜炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
無菌性髄膜炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マイコプラズマ肺炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クラミジア肺炎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

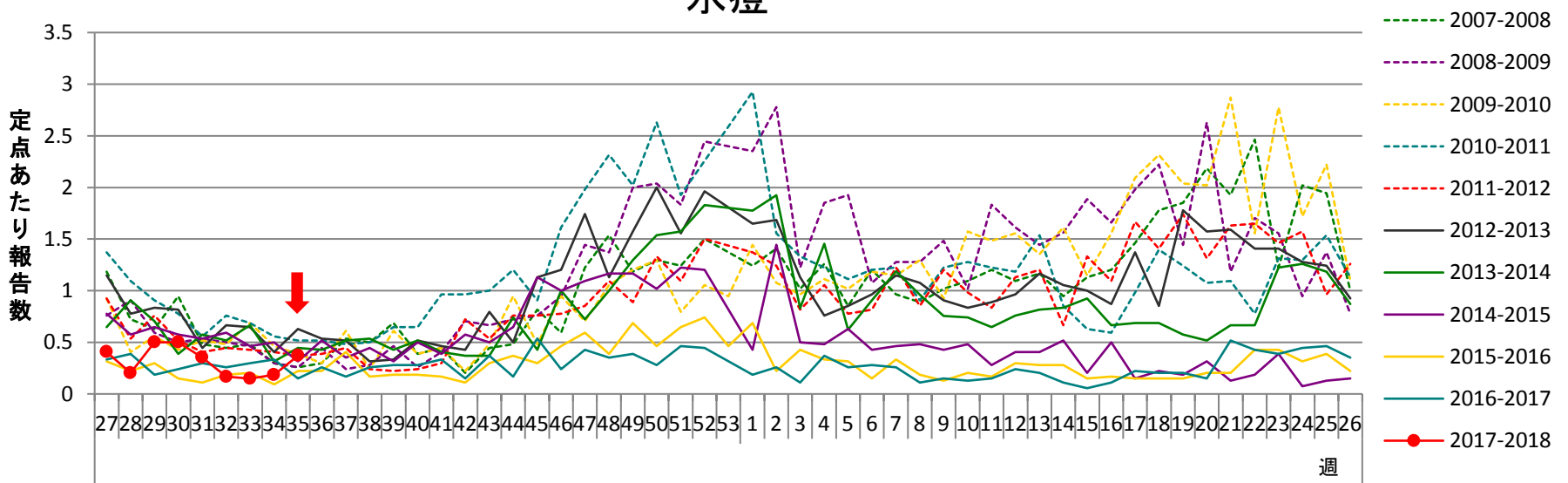
(- : 0)



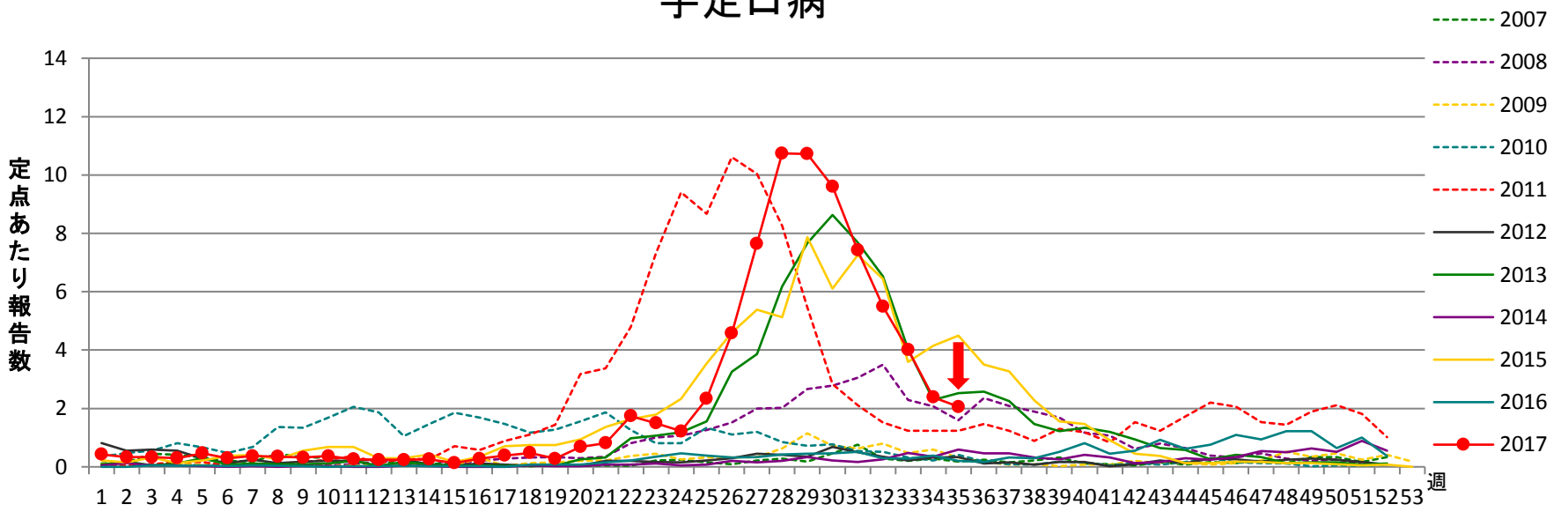
感染性胃腸炎



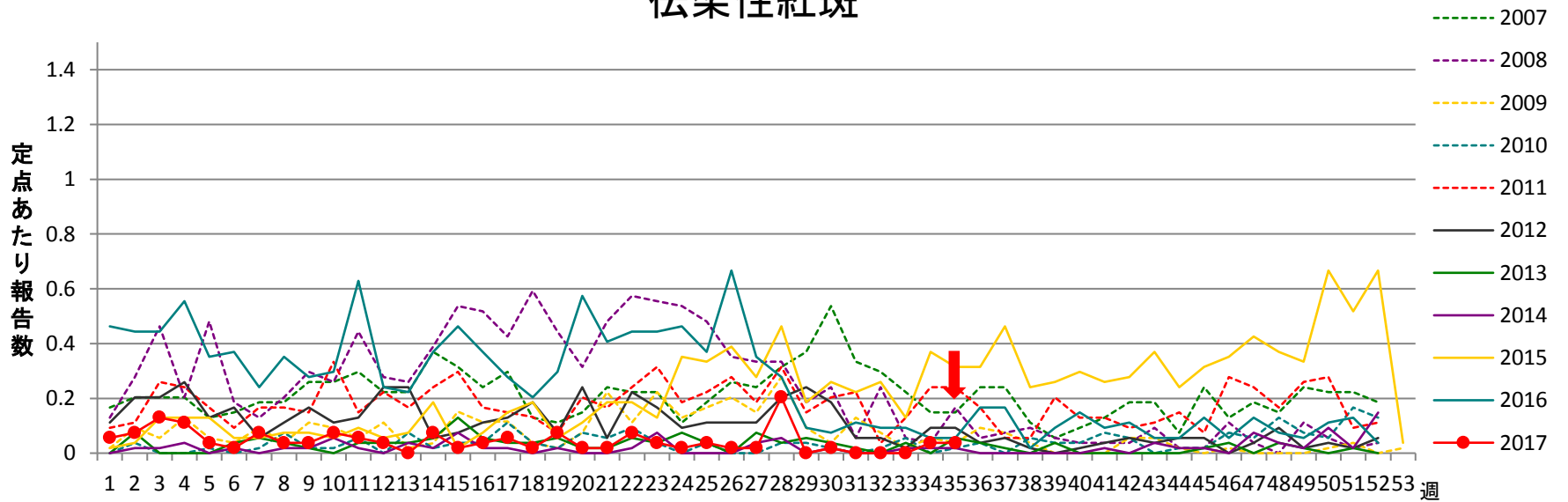
水痘



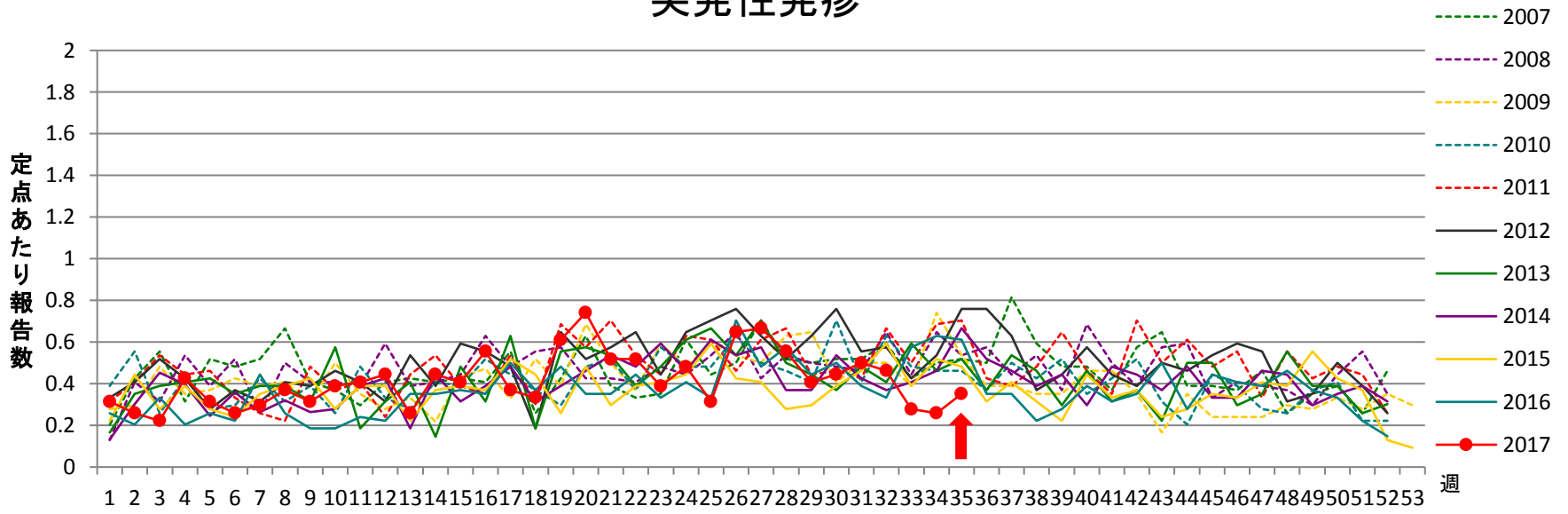
手足口病



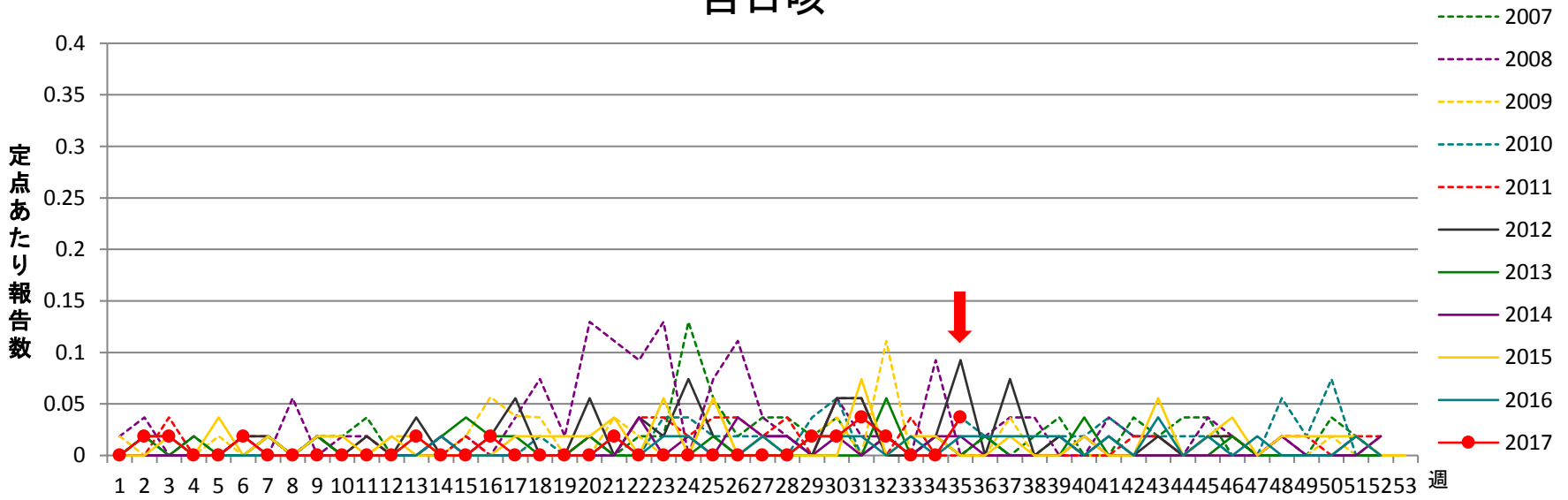
伝染性紅斑



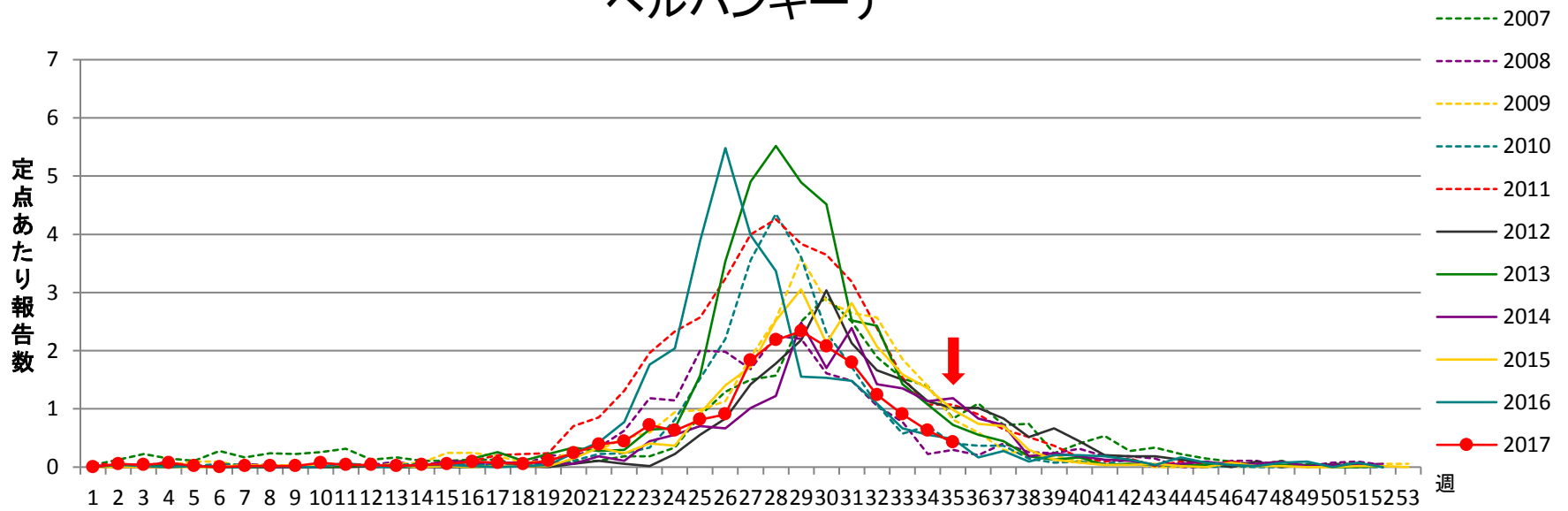
突発性発疹



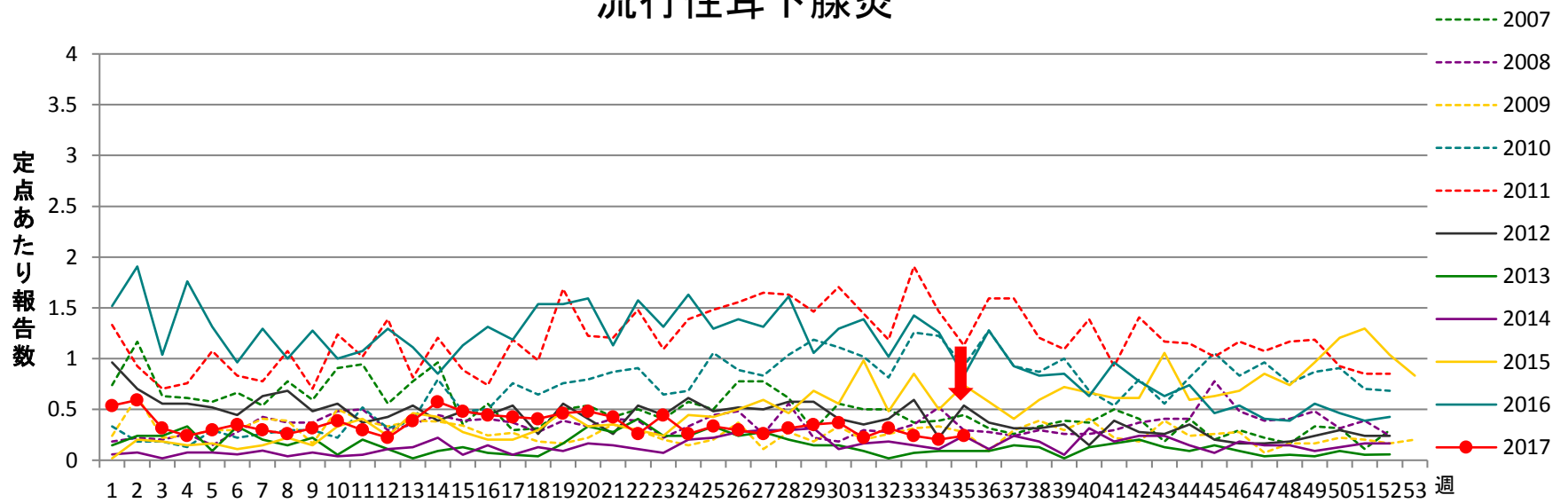
百日咳



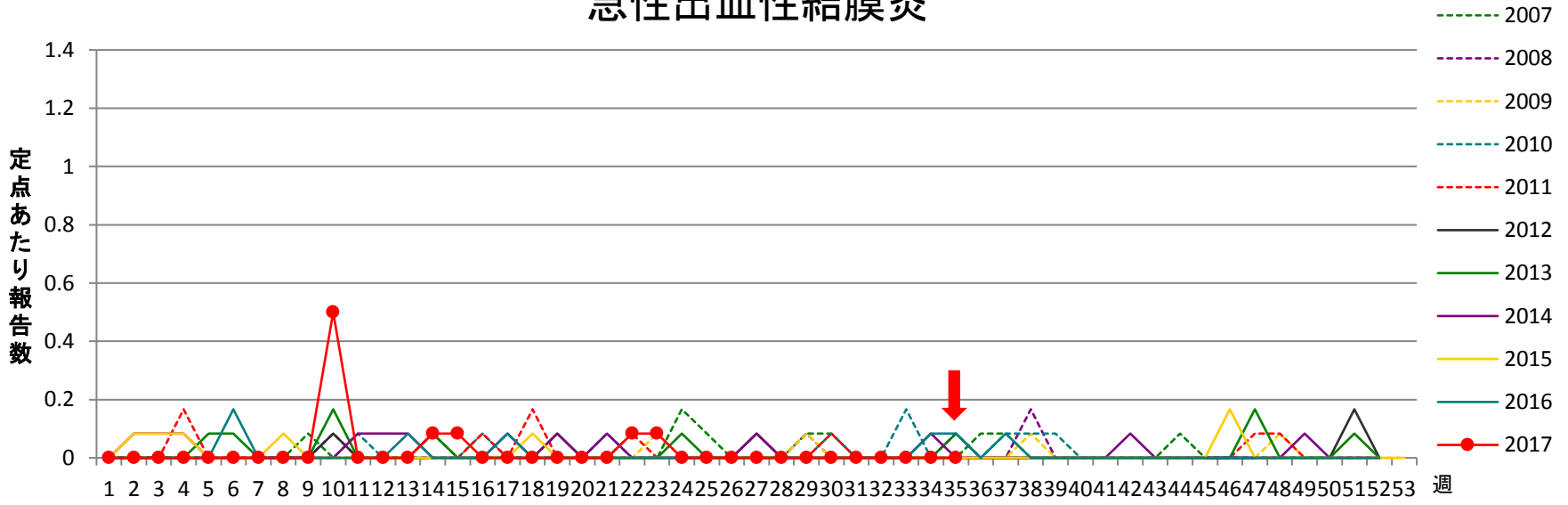
ヘルパンギーナ



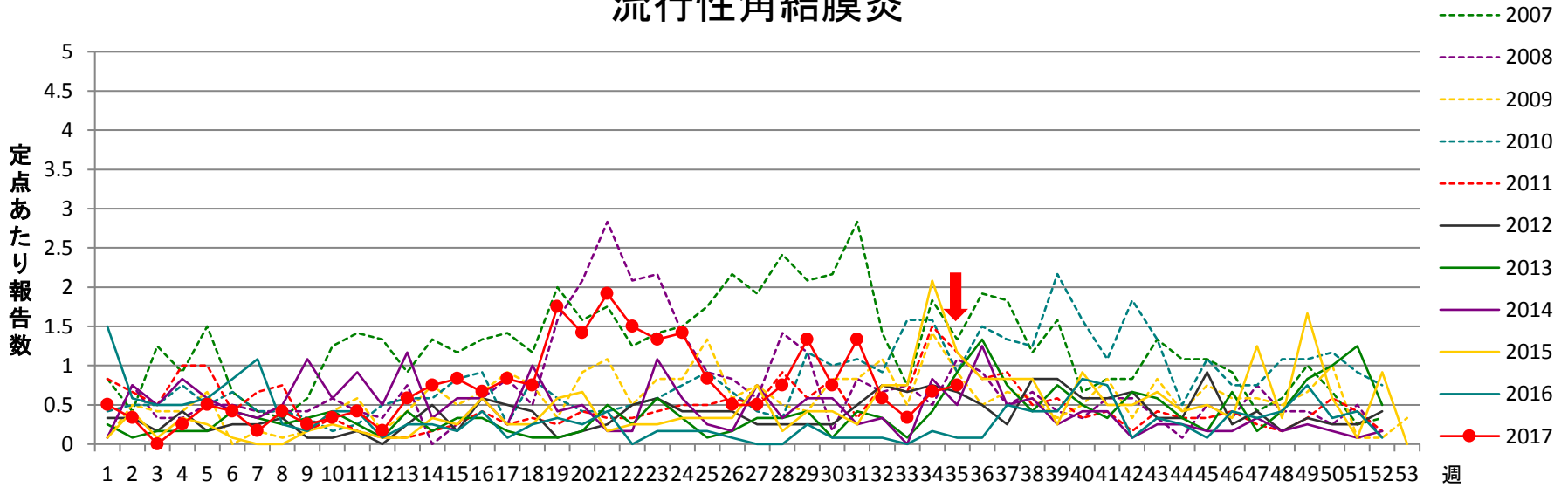
流行性耳下腺炎



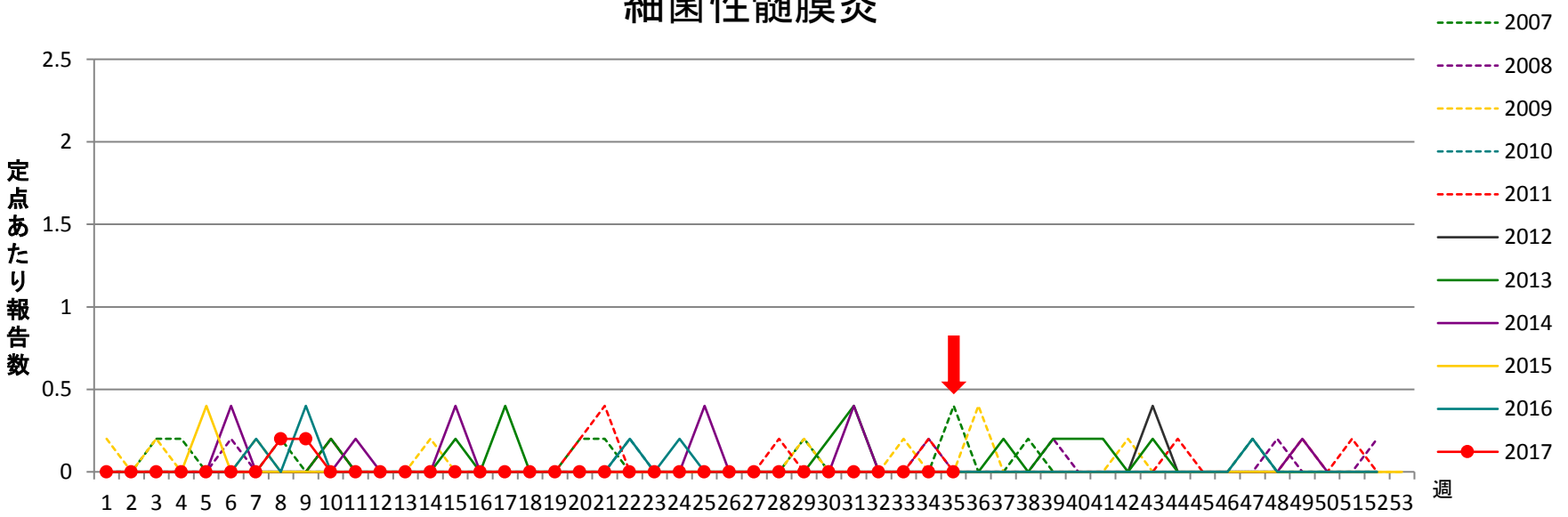
急性出血性結膜炎



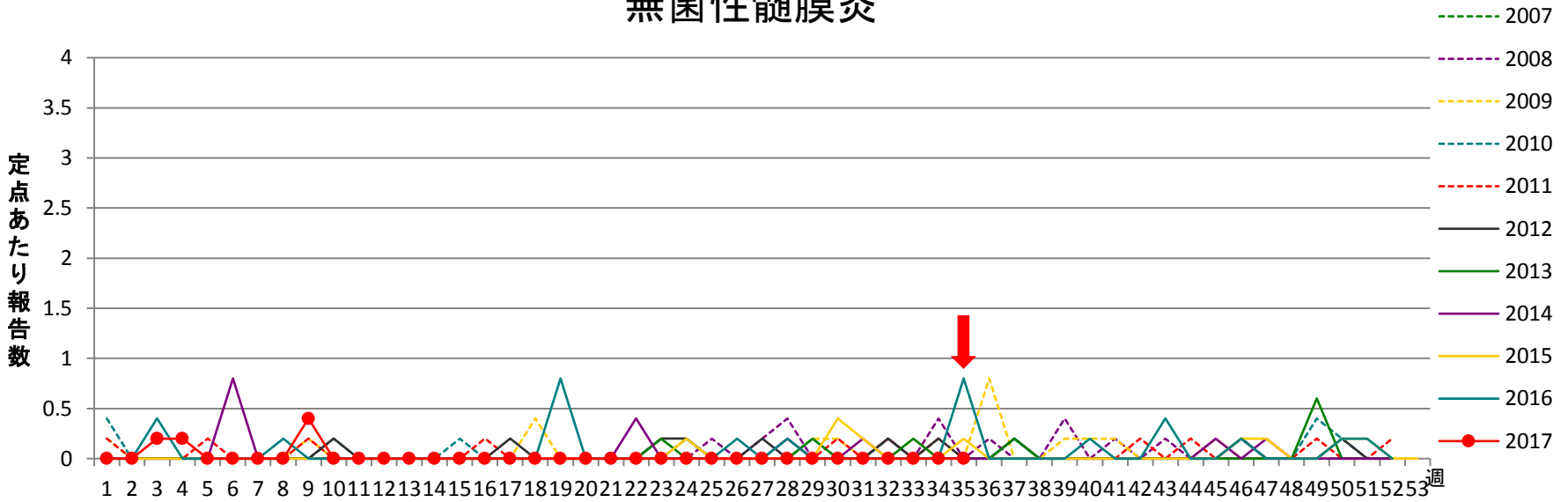
流行性角結膜炎



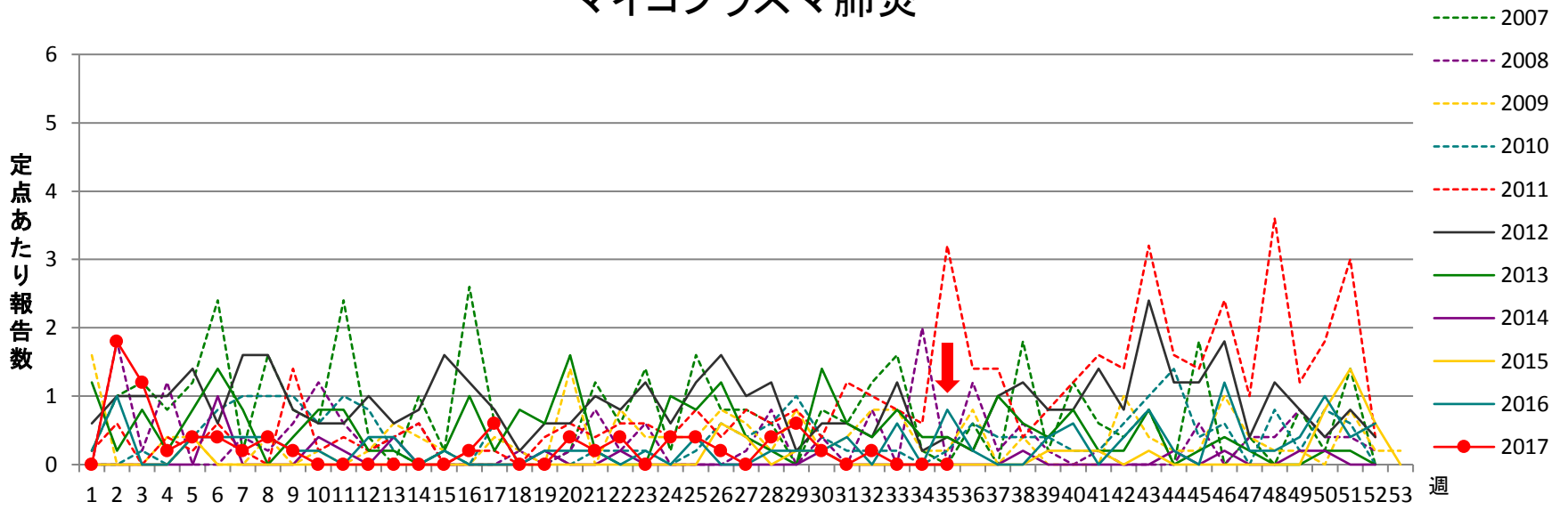
細菌性髄膜炎



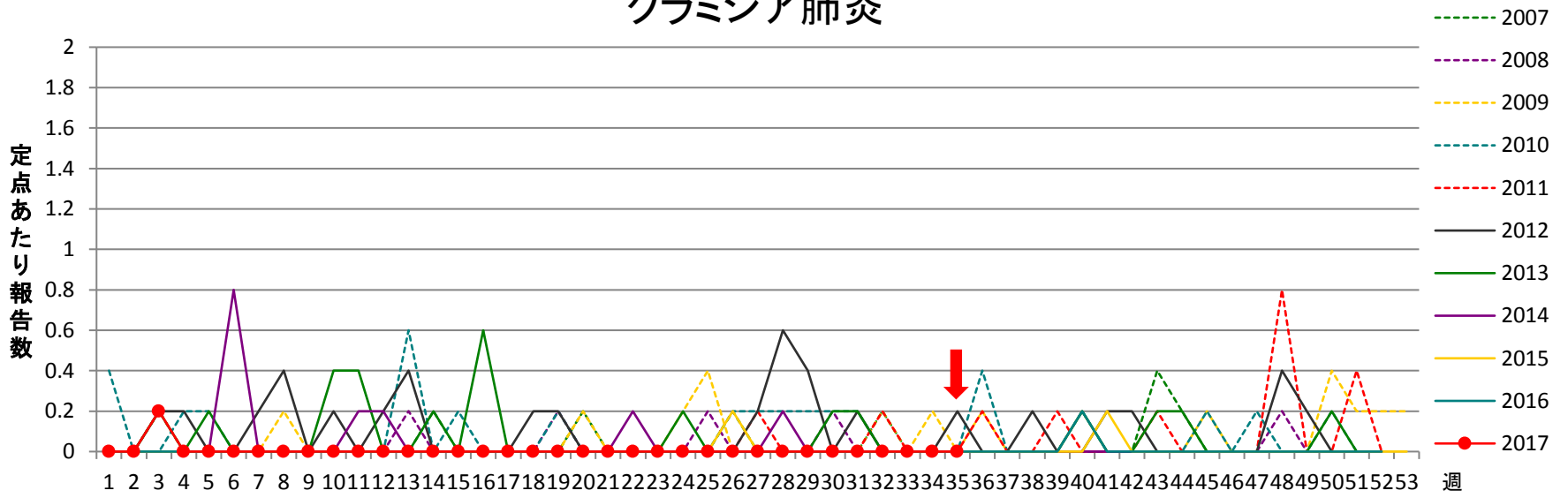
無菌性髄膜炎



マイコプラズマ肺炎



クラミジア肺炎



感染性胃腸炎(ロタウイルス)

